

令和 5 年 度

事業計画書及び収支予算書

公益財団法人

神 津 牧 場

令和 5 年度 事業計画(案)

1. 情勢と方針

令和4年度を振り返ってみれば牧場経営に対する新型コロナの影響は来場者の減少などによる売り上げの低下だけではなく、物流の停滞による飼料の高騰などがみられた。さらに昨年2月に始まったウクライナ戦争によって、肥料の高騰やエネルギー価格の上昇が起これ、原材料の値上がり続いている。こうした売り上げ減少や資材の高騰といった要因の他、社会環境の変化も牧場経営に大きな影響を与えている。すなわち、有給休暇の取得義務化などの働き方改革や官民挙げての賃上げ圧力による人件費の上昇と人員の確保、各種デジタル化への対応が迫られている。また、これまでも提起されている牧場施設や機械の老朽化への対応、製酪工場建設時の負債とコロナ融資の返済など課題が山積している。

神津牧場はジャージー種牛の放牧飼養を生産の核として生み出される生乳を付加価値の高い乳製品に加工し、販売するとともに、放牧によって生み出される優れた景観を一般に開放し、消費者理解を得ながら、牧場の持つ資源を顕在化させるというビジネスモデルを作ってきた。生産―加工―販売―観光と連関を作ることによって6次産業化することで付加価値を高めるとともに、地域観光の拠点にもなってきた。

こうしたコロナ以後、情勢の変化に対応して、令和2年には政策金融公庫から 2000 万円、農協から 2000 万円の緊急融資を受けたが、令和3年も更に 1000 万円の融資を農協から受けるに至っている。コロナの流行は続いているが、若者の重症化率が低いことから、政府も昨年度後半からコロナ後に向けて、行動制限を緩和する方向へと変化している。現在、自主判断によるマスクの着用や感染症法の2類から5類へ移行の方針が出されている。人々の行動もコロナ前に戻りつつあるように見られる。こうした変化は牧場経営の回復にプラスとなるが、この3年間に負った影響は非常に大きいものがある。コスト上昇はコロナだけではなく、複雑な要因が重なっていることを考えると新たな事業展開を模索する必要があると思われる。

原料等の値上がりに対する対応

- ・ 昨年 5 月に乳製品等の値上げを実施した。しかし、その後の原材料の値上げが続いていることを踏まえ、必要に応じて再値上げを検討したい。

新型コロナに対する対応

- ・ 新型コロナの 2 類から 5 類への移行が 5 月中旬から予定されていること、自主判断によるマスクの着用が 3 月中旬から始まることを踏まえて、アフターコロナの体制へ段階的に移行することとする。職員及び来場者への呼びかけ内容を検討する(職員は接客時はマスクの着用、屋内では換気に注意し、過度の3密(密閉、密集、密接)の回避や手洗いを呼びかける、など。)

販売の強化

- ・ 販売動向を分析すると、当初(令和2年度上期)は牧場の通信販売やギフトの販売が好調であったが、その後はギフトの販売が低下した。牧場の通信販売は好調を維持しているが、ギフト販売は多くの業者の参入があり牧場商品の販売は低迷した。牧場の通信販売(自社通販)の有利性が認識された結果となった。牧場の HP での通販が一定の成果を上げているのは価格競争に巻き込まれないブランドと品質への信頼の賜物であろう。
- ・ 3年間の経験から HP での通信販売を強化する。特にお中元・お歳暮セールの販売を強化するとともに冬にも期末セールを試みたい。また、ふるさと納税やその他のギフトは取扱業者、町との連携を密にした取り組みとする。対応するオリジナルセット商品(受賞チーズのセット)の提案、地元業者との連携による商品の開発を行い、販売の拡大を図る。

広報宣伝

- ・ これまでも行ってきたことであるが、メディア等を用いた宣伝はコストパフォーマンスの高い宣伝である。今後も機会を積極的に捉えて実施したい。
- ・ 現在、ホームページのブログや Twitter での発信を行っている。これらの SNS 利用はマーケティングの面からも効果が高いので、今後も積極的に進める。
- ・ 下仁田町では牧場隣接の世界遺産構成資産「荒船風穴」の来場者数増加を目標に、宣伝を企画しており、連携しての取り組みを進める。
- ・ 菓子などの原材料として牧場産の乳製品を求める要望が続いている。原材料としてではなく、「神津牧場の〇〇を使った・・・」との宣伝効果を期待してのものもある。販売だけでなく宣伝媒体ともなるので、今後も連携して積極的に進めていく。

イベント・体験

- ・ コロナ対策に留意しつつ、花まつり、もみじ祭りはコロナ以前を目指して開催をすすめる。
- ・ 体験イベントとして「乳しぼり」、「お散歩ヤギさん」、「牛追いツアー」など行う。
- ・ 牧場主催の宿泊型牧場体験教室は回数を増やして行く。また、親子だけに限らず、大人にも広げていく。
- ・ 小学生、中学生向けの団体の体験は可能な限り受け入れていく。
- ・ 地域のイベントにも積極的に参加をしていく。

牧草・家畜生産

- ・ 生産基盤である牛舎施設及び生産機械の老朽化が著しい。1 昨年にはダンプトラックの更新やホイールローダ、ボブキャットの修理、ロールベアラーの更新が重なった。搾乳施設やトラクタも耐用年数を超えており、更新が必要となっている。
- ・ 群馬県によるシカの捕獲事業は順調に進められている。年を追うごとに捕獲頭数が減少しており、出現頭数の増加は抑えられているものの、牧草被害は見えるほど軽減していない。今後も捕獲実施者の猟友会、モニタリング調査の(株)野生動物調査事務所、シカの生態調査を行っている麻布大学や農研機構とも協力して、対応する。

牧場の多面的機能の拡充(J クレジット)

- ・ 広大な草原は開放的であり、森林の多い我国では保健休養機能が高い景観として評価されて

いる。さらに大型動物や水辺景観の存在が加わると保健休養機能をさらに高めるものとされている。放牧を核とした家畜飼養を行っている神津牧場は山岳地帯にあり、387ha の広大な土地に約100ha の草地を有している。草地以外の 280ha 弱の土地はほとんどが天然林である。これらの林はかつて薪炭林として利用されていたが、現在では全く利用されていない。地球温暖化対策として、炭酸ガス吸収源としての森林の役割が評価され、排出権取引(J クレジット)の対象とされている。これまで人工林がその対象であったが昨年8月から天然林も対象に加えられたことから、牧場の天然林も CO2 吸収という機能が評価される道が開けてきた。具体的な事業化に向けての検討を進めていきたい。

2. 事業に関する事項

＜公益目的事業Ⅰ：ジャージー種牛の放牧酪農経営における6次産業化モデルの構築に関わる調査・実証・研修事業＞

1) ジャージー種牛の飼養

(1) 草地管理及び飼料生産

- ・ 循環型の草地管理を目指し、採草地は家畜排せつ物と廃菌床を原料とする堆肥の散布、放牧地は尿素等の購入肥料により、生産を維持する。
- ・ 放牧家畜の配置は従来通り本部地区、肥育素牛の放牧は峠地区、育成牛放牧は桶萱地区とし、本部地区では高栄養の牧草供給のため、短草利用と季節生産に対応した兼用利用を図る。
- ・ 貯蔵粗飼料は上述したように、シカの食害が著しい。群馬県の捕獲事業とも連携して、フレキシブルな兼用利用をおこなう。
- ・ なお不足になることが最近常態化しているため、次善の策として地域資源の稲WCSの調達も行う。
- ・ 草地の老朽化も進んでおり、計画的な草地の更新も必要となっている。

(2) 放牧飼養技術の確立及び乳牛改良・種畜供給事業

- ・ これまでの共同研究や草量調査から 10 月以降の放牧地からの栄養供給が不足となることが明らかとなった。
- ・ このことから10月以降の放牧方法や放牧地植生の改善のため、兼用利用を含めた放牧地の利用方法や施肥管理を改善する。
- ・ 東京農業大学との共同研究の成果をとりいれて、能力改良を進め、牛群検定などの結果を有効に活用し、繁殖管理の徹底、選抜淘汰の実施により、産乳能力の向上を図る。
- ・ 和牛の受精卵移植による子牛生産・販売(5 ヶ月齢;30-60 万円)を行った結果、技術確立と評価も安定してきた。さらに飼養管理などの技術改善を進める。

(3) 放牧受託(公共育成牧場)

- ・ 4 月下旬から 10 月中旬までの夏期預託放牧による公共育成牧場事業を行う。
- ・ 家畜保健衛生所の協力を仰ぎ、衛生管理と繁殖管理を重点とし、人工授精技術の向上に努めて事業を遂行する。
- ・ 近年、受託農家が減少しているが、受入可能頭数は50頭程度であるので、農家へのアピールを積極的に行い、受託頭数の増加を図りたい。

2) 畜産物の利用・加工技術の開発

(1) 乳製品の利用・加工技術の開発

- ・ 神津牧場ではチーズ、パック牛乳、ヨーグルト、アイスクリーム、ソフトクリームについて独自技術による製品化を実現し、神津牧場ブランドを確立している。
- ・ 消費者のニーズの多様化対応してはちみつバター、森のにんにくバター、モッツアレラチーズ、スパイスチーズ、サラミケーゼ、トマトアンドバジル、下仁田ねぎチーズなどの新商品の開発を行ってきた。特にチーズは Japan Cheese Award（日本チーズプロフェッショナル協会主催）や国産ナチュラルチーズコンテストで受賞している。新たに開発した「さんしょう」や「クリームチーズしょうが」を販売して、消費者評価を進める。
- ・ 本年度も新たな商品開発を行うと共に、菓子メーカーなどと共同して、新たな商品開発を行う。

(2) 肥育・加工

- ・ 放牧牛肉は、おいしさの成分や各種の機能性成分、オメガ 3 脂肪酸を多く含むことが明らかにされてきている。
- ・ 神津牧場ではジャージー牛の 2 シーズン放牧肥育による赤身肉生産を行っているので、この特徴と肉製品のうまさの積極的な宣伝し、放牧牛肉の市販に繋げる。
- ・ また、廃用雌牛も加工品やレトルトなどを開発して新たな製品化と販売チャネルの拡大（ふるさと納税返礼品）を図っていく。

(3) 放牧養豚

- ・ 豚熱の国内での発生と野生イノシシの豚熱の感染拡大が続いており、今年も牧場での放牧養豚を中止する。

(4) 実習生・研修生の受入れ

- ・ 神津牧場の特徴は放牧飼養、生産から販売まで一気通貫で研修できるところにある。この特徴を生かした研修プログラムを実施する。
- ・ 畜産後継者の研修として、農業系大学生、農業大学校生、動物専門学校生を対象とした実習生の受け入れを今年も行う。
- ・ コロナの流行を留意しながら、長期の研修者を優先して、受け入れを行っていく。

(5) 乳製品の卸販売

- ・ 乳製品の卸販売は牧場経営にとって中核となる事業である。牧場で生み出されるジャージー牛の生乳やジャージー牛肉を原材料とした乳肉製品を高価格で販売して行くことが真の評価につながり、最終的な6次化産業モデルとなる。
- ・ このため、「日本最古」、「放牧」、「ジャージー牛」、をキーワードとしてブランディングを行い、消費者ニーズと商品と販売チャネルの対応を明確にして、商品開発と販売戦略の構築を図って行く。
- ・ このことにより、場内の売店のほか、各地の道の駅などの販売強化につなげて、牧場の財政基盤の確立にも努める。
- ・ また、贈答商品の販売チャネルとして、郵便局、デパート、ギフト業者等との連携を強化するとともに

に、インターネットを通じた販売やギフトに積極的に取り組む。

- ・ 各地で開催されるイベント等に参加して消費動向の把握や地域連携をつくって行く。
- ・ また、牛乳・バターは製菓・パンの原料としての需要も強く、素材としての利用など新分野の開拓をしていく。

(6) 外部機関との共同研究事業

(共同研究の実績一覧は後述の〈参考〉を参照)

- ・ 麻布大学の野生動物研究室との共同研究として、アナグマの生態調査などを継続する。成果は獣害防止とともに自然環境教育の材料として、体験学習などに利用する。
- ・ イノベーション創出事業でのペレニアルライグラスの永続性実証研究は終了したが、継続しての永続性の調査には協力する。

＜公益目的事業Ⅱ：牧場の持つ多面的機能の発揮促進事業＞

(1) 牧場体験および緑資源の高度利用

- ・ 神津牧場は「妙義荒船佐久高原国定公園」の中核に位置し、群馬県に生息する大型野生動物12種のうち10種が確認され、豊かな自然が形成されている。この豊かさは森林と草原がモザイク状に配置された景観にある。また、放牧により形成される草原生態系は独特な動植物を育む場となっており、生物の多様性を育む基盤となっている。これらの自然資源や牧場資源はグリーンツーリズムや保健休養機能として、多くの人に親しまれてきた。今後も体験学習などをおとして、牧場の自然を積極的に展示・発信を行っていく。
- ・ 「家畜飼養管理基準」に則って、畜産理解醸成を図るべく酪農教育ファームとして、これまで整備された施設を活用し、幼稚園から大人までを対象に広げて、日帰型あるいは宿泊型の牧場体験プログラムを充実させていく。
- ・ 体験としては草食家畜のエサとなる牧草の刈り取り体験、刈り取った牧草の給与体験、子牛の哺乳体験、搾乳牛の乳搾り体験、放牧家畜の観察(ガイドツアー)、夜の牧場探検(夜の家畜の観察)、バター、アイスクリームの畜産物製造体験など様々なプログラムを作成して畜産の理解醸成を図る。
- ・ 外部機関との共同研究による成果をシカ、イノシシの獣害対策や各種の自然体験プログラムに取り入れ、親子牧場体験などに活用したエコツーリズム事業にさらに発展させていく。
- ・ 新たな機能として牧場の保有する天然林が持つCO2吸収機能を顕在化させ、排出権取引として事業化するため、Jクレジットへの登録申請の検討を進める。

(2) 家畜とのふれあい及び畜産理解醸成

- ・ 動物とのふれあいは多くの国民のから期待されるところである。飼養管理基準に留意しつつ、畜産の理解醸成に努める。
- ・ さらに、動物とのふれあいに資するためポニー、ウサギ、山羊等の飼養展示を行い、積極的に動物との接触体験ができるように工夫をおこなう。
- ・ 情報発信の手段としては体験プログラムのチラシを配布する他、ホームページをさらに充実させ、ブログ等も通じて最新情報を発信する。

＜収益目的事業＞

- ・ 神津牧場ロッジでは来場者に対し、飲食、宿泊、売店の営業を行う。物販は牧場の生産物を中心に特色のある品揃えを行う。
- ・ 隣接地には世界遺産の構成資産である「荒船風穴」があり、牧場からの集客を期待されている。そのため、風穴事務局と連携した取り組みを行う。下仁田町観光協会(DMO 法人)や佐久市振興公社とも連携して、地域活性化の取り組みを行う。
- ・ 昨年設置したミニ資料館では牧場の歴史的資産などの公開や、牧場の宣伝を行う。また、地域情報の宣伝にもつとめ、妙義荒船佐久高原国定公園の中核としての役割を果たす。
- ・ 「道の駅しもにた」の神津牧場ミルクバーでは物販と喫茶の営業を行うとともに、神津牧場の宣伝を通して、公益目的事業の強化と下仁田町の地域活性化に資する。

＜参考:令和5年度における外部との共同・協定試験研究(◎継続予定、●は終了済)＞

◎ 農研機構畜産研究部門(藤森・内山)

- ・ 新品種の永続性についての継続試験(ペレニアルライグラス、オーチャードグラス)

◎ 野生動物被害対策調査:麻布大学(塚田)、農研機構中央農業研究センター(竹内・秦)、NPO 法人あーすわーむ(南、福江)

- ・ ライトセンサスによる牧場内のシカ個体数の長期モニタリング
- ・ イノシシ及びタヌキによるカーフハッチ、肥育牛舎の盗食防止対策の実験。

◎ 野生動物調査:麻布大学野生動物研究室(塚田)

- ・ カメラ・ビデオを設置による牧場内出現動物の種類と数の把握。
- ・ カラス被害防止法試験(新規)
- ・ シカの被害解析と防止策。
- ・ 電気牧柵による獣害回避効果を検討。
- ・ 発信機による野生鳥獣の位置測定
- ・ 赤外線カメラを利用したタヌキの盗食被害の実態と回避策の検討
- ・ ニッポンアナグマの生態調査

● 農林水産省所管の競争的資金「イノベーション創出強化研究推進事業」＜育種対応型＞

課題名:寒冷地・温暖地における高品質多年生牧草の育成と利用年限延長のための技術確立
代表機関:(国立研究法人)農業・食品産業技術総合研究機構 畜産草地研究所(上山)

● BLV(牛白血病)根絶のためのアブトラップの設置:(国研)農研機構中央農研センター(白石)、群馬県西部家畜保健衛生所(今井)

- ・ 各草地に捕集のためのアブトラップを設置し、経時的に捕集し種類を同定。
- ・ BLV 清浄化のための対策。

- 草地診断に基づく草地管理：畜産草地研究所(山本・平野)、県畜産協会
 - ・草地の植生調査及び収量調査。
 - ・飼料成分の測定。
 - ・ライジングプレートメーター法を用いた牧草採食量の測定。
 - ・荒廃草地の追播更新試験。

- 山羊を使った雑草管理の実証試験：家畜改良センター長野支場、上野動物園
 - ・継続実施、管理地の拡大。

- ジャージー牛の乳生産に影響を及ぼす栄養要因とその制御機能の解明：日大(梶川)
 - ・機能性成分 CLA 産生に対する大豆給与の効果(放牧によって産生される共役リノール酸の増強を大豆によってさらに強化できるか)

- 放牧牛肉の機能性成分：九州沖縄農研センター(常石)
 - ・放牧ジャージー牛肉の機能性成分の測定。
 - ・牛肉の肥育様式と機能性成分の関係解明。

- 放牧牛乳のプレミアム化のためのデータ蓄積：畜産草地研究所(梶村)
 - ・放牧ジャージー牛乳の機能性成分による高付加価値化。

- 堆肥発酵の促進技術の開発：畜産草地研究所(阿部・小島・山本・平野)
 - ・インパクトエアレーション方式と腐菌床の利用による堆肥化試験の継続。
 - ・草地への施肥効果の試験を継続。

- 神津牧場のジャージー牛の遺伝的変遷：東京農業大学(古川)

神津牧場の繁殖データを提供することにより、データベース化と創業以降のジャージー種の遺伝的系譜が明らかになることが期待されている。